



3. 御爪箱

爪を切る道具を納めた漆塗りの方形の箱。皇族が幼少時(7歳頃まで)に使用する。箱は2つで1セットで、中には爪切り用の洋ハサミ、紅皿、筆、おふくさ、小形の染付蓋物などが納められている。

通常、爪切りは洋ハサミを用いる。また、ハサミは手の爪用と足の爪用を分けて使用する。高松宮の御爪箱のハサミにはそれぞれ「上」、「下」の印が付されているが、これは、「上」は手、「下」は足の意味であろう。おふくさの上で爪を切り、切り終わった後にそれぞれの指に筆で紅をつける。紅をつけるいわれは定かではないが、消毒の意味があったものと思われる。

なお、皇室では、1月7日の七草の日に、七草を入れた水に指を浸し、その年最初の爪切りを行う習慣がある。

下の2つの御爪箱は筆者が幼少時に使用したもの。高松宮所用のものとは比べて染付蓋物が大きい。
(徳仁親王)

